「故郷ナザレでのつまずき」　　2017 年 05 月 19 日

マタイ福音書 13 章 53 節～58 節　イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

主イエスは、ガリラヤ湖の周辺の町々で、慰め深い言葉と力強い業を求めて集まる民衆に語られた。語り終え、故郷ナザレに帰り、安息日に会堂で教えられた。聞いた村人たちは驚き、「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう」と言った。会堂では通常、ファリサイの人々が教えていた。彼らの教えは律法を事細かに解釈し、しかも、神の言葉であると権威付け、民衆の生活を縛る息苦しいものであった。主イエスの教えは生活に根差し、神の恵みを身近に感じる喜びに満ちたものであった。また、主イエスの奇跡の話を伝え聞き、ナザレの村人は主イエスの言葉と業に感嘆したのである。

ところが一方で、「この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう」という評価もあった。父は大工のヨセフ、母はマリアである。主イエスの子ども時代、青年時代のことも知っていただろう。兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ、そして名前は記されていないが、姉妹たちがいた。家族は皆、同じナザレに住んでいる。村人たちは家族の全てと、父ヨセフを早く亡くし、貧しい家族であったことを知っている。その家族の長男が、素晴らしい教えを語っているので、どこで知恵と力を得たのであろうかといぶかった。

教えには感嘆したが、主イエスの家族を知って、つまずいたのである。パウロはコリント書（二）5 章 16 節、17 節で、「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」と書いている。ペトロやヨハネは主イエスに直接教えを受けた愛弟子であるが、パウロは主イエスに会ったことのない、信頼できない宣教者であるというコリント教会での批判に対する弁明である。この言葉には真実がある。人を出自、学歴、身分で判断すれば、その人の実態が見えない。ナザレの村人は、パウロの言う「肉に従って」主イエスを見て、神の霊により新しくされた主イエスを見なかったのである。村人はつまずき、信頼しようとしなかった。

主イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言われた。未熟だった過去の姿にとらわれる故郷、家族は預言者になっても受け入れられない。主イエスも同じように、故郷では敬われることはなかった。不信仰なナザレの村人はつまずき、主イエスは奇跡をなさらなかったという。福音の宣教は信頼関係の中で行われるものであることは、牧師が痛いほど経験していることである。